

女子大学生のエイズ・性感染症に関する意識¹⁾

——養護教諭、保健体育教諭を目指す学生の当事者・支援者意識——

山崎裕美子¹・近藤 照敏¹・加納 亜紀¹
林 照子¹・浦川 文恵²・井上 史子²
出井 梨枝¹・井上 敏子²・浦岸 英雄¹
林 淑美¹・吉川 祥代²・阪田 典子²
牧川 優¹

¹ 園田学園女子大学

² 尼崎市保健所

キーワード：女子大学生、エイズ、性感染症、当事者意識、支援者としての意識

Abstract

The objectives were to investigate and analyze the awareness of the female university students who want to be school nurse teachers or health and physical education teachers, concerning HIV/AIDS and STD/STI. The participants were female university students, 1st to 3rd years in a women's university. We used the original questionnaires, and the valid answers were 202 (84.2%). From the results, we could say that they thought about HIV/AIDS with "awareness of the concerned persons". But the answer ratio related "awareness of their supporters" was low. It seems to be important to offer participation-type and community collaboration-type learning opportunities to improve their awareness.

はじめに

エイズ (AIDS; Acquired Immune Deficiency Syndrome、後天性免疫不全症候群) 患者は、1981年にはじめて米国 CDC (Centers for Disease Control and Prevention, 米国疾病予防管理センター) で、その後 1985 年には日本でも最初の患者が確認された。

1988 年、WHO (World Health Organization, 世界保健機関) は、世界 133 カ国で 8 万人以上の患者数を報告し²⁾、同年 12 月 1 日を世界エイズデーと定め、世界的な予防啓発活動を繰り広げてきた。しかしその 20 年後となる 2008 年、HIV (Human Immunodeficiency Virus, ヒト免疫不全ウイルス) 感染者数は約 3340 万人 (うち、15 歳未満 210 万人)、2008 年の新規 HIV 感染者数

は約 270 万人（同 43 万人）、2008 年のエイズによる死亡者数は約 200 万人（同 28 万人）と推計され³⁾、増加の一途をたどっている。地域別に見ると、サハラ以南アフリカが推計 2240 万人を占めて圧倒的に多いが、アジアでも南・東南アジアが 380 万人、東欧・中央アジア 150 万人、東アジアでも 85 万人となっており、さらなる拡大が懸念されている。

日本国内では、2008 年エイズ発生動向⁴⁾によると、新たな HIV 感染者 1126 件とエイズ患者 431 件で、新規発生件数は計 1,557 件と過去最高となった。地域別では、HIV 感染者、エイズ患者数ともに東京都、大阪府が 1、2 位を占め、大都市を中心とした拡がりをみせている。著者らの属する大学および保健所の所在である兵庫県も 10 位以内に入っている。15 歳から 24 歳の層でも増加傾向にあって、女性の割合が他の年齢層より高いという特徴があると指摘されている⁵⁾。

そのような中で医療や教育の果たす役割は大きいですが、本研究では、養護教諭や保健体育教諭として、近い将来、学校におけるエイズ教育・性教育に中心的役割を果たすことが期待される学生の意識に焦点を当てた。

学校におけるエイズ教育は、医療において治療や予防、早期発見が推し進められてきたことと関連しながら、同時に学校教育として取り込まれてきており、保健科教育の中で位置づけられている。現行の学習指導要領においても、感染症予防の内容として明記されている。教員養成の段階で保健体育教諭、養護教諭を目指す学生にとっては、教科教育法及び保健指導の中で履修課題となっているのである。

教育研究では、すでに 20 年前には養護教諭の役割についての研究がみられ⁶⁾、現在では予防教育、性教育、健康教育、授業研究や教材研究といった観点から研究され⁷⁾⁸⁾、学校と地域の連携も論点となっている⁹⁾。

本研究では、1～3 年生 202 名の女子大学生の回答から、エイズをはじめとした性感染症¹⁰⁾に関する意識について、とりわけ当事者意識、支援者としての意識について検討した。病名や感染経路、予防法は多くの学生に大学入学前に学習済みと認識されていた。また真剣に自分の問題として悩み考えようとしていることなど、当事者意識につながる意識を持つものも多いことがわかった。今後必要な知識として、さらなる知識の補強に加え、感染者の生活実態への関心も割合高かった。支援方法や予防方法といった行動レベルでのニーズは少なかったが、養護教諭や保健体育教諭を目指す学生が多い対象者において、地域連携型や学生参加型の教育機会を提供することにより、今後支援者としての成長が期待される結果だと考えられた。

I 目 的

主に養護教諭や保健体育教諭を目指す健康系学科に所属する女子大学生の、性感染症やエイズについての学習状況や考えを知り、特に当事者意識や支援者としての意識について検討することを目的とした。

II 用語の定義

1. 当事者意識

自分自身がエイズをはじめとした性感染症に感染・発症したり、恋人や家族など身近な人が感染・発症する可能性がある存在、すなわち当事者であると認識していることを指す。関連する思考や行動を規定する。

2. 支援者としての意識

性感染症、とりわけ HIV 感染者（陽性者）やエイズ患者・その家族らを支えたすける、すなわち支援しようとする意識を指す。

III 方 法

1. 対象

A 女子大学における健康関連の同一学科に所属する 1～4 年生 330 名を対象として調査を実施し、うち 1～3 年生 240 名を本論文での分析対象とした。調査の説明を受け、依頼文を読み調査に同意した学生から回答を得た。

2. 調査方法

保健所側共同研究者の提示による設問案を基に検討し、簡単に回答できる A4 用紙 1 枚に 5 つの設問－小・中・高など今までの学校の授業での学習内容（〈設問 1 初等中等教育での学習内容〉）、自分自身の感染予防方法（〈設問 2 自分自身の感染予防〉）、パートナーからエイズ感染を打ち明けられたときの交際（〈設問 3 パートナーからの感染告知時の交際〉）と、同じ状況での行動（〈設問 4 パートナーからの感染告知時の行動〉）、これから知りたいこと（〈設問 5 今後必要な知識〉）－を配した無記名自記式質問紙を作成した。

調査は、2008 年 7 月に実施した。授業前後の時間を活用して、依頼状と調査用紙を配布し、趣旨・方法・個人情報保護に関する説明を行い、無記名での回答を求め、その場で中折にして回収箱に回収した。

3. 分析方法

結果は表計算ソフトウェア Microsoft Office Excel[®] Version 11.6539（マイクロソフト株式会社）を用いて入力し、記述統計をおこなった。質問項目間の相関性については、統計解析ソフトウェア SPSS[®] Version 17.0.0（エス・ピー・エスエス株式会社）により、Spearman 相関係数を求めた。有意差は 1% 水準で判断した。自由記述は、内容分析により意味内容を検討し、カテゴリー

分類した。

4. 倫理的配慮

依頼状および質問紙、対象者への説明と同意、個人情報の保護等の研究計画全般について、園田学園女子大学生命倫理委員会の審査を受け、承認を得た。それに基づき、研究の各段階で倫理的に配慮した。

IV 結 果

1. 回答者について

回答は、1年生79名、2年生57名、3年生66名の計202名（回収率は学生数240名に対して84.2%）で、すべてを有効回答とした。

2. 学年と相関のあった項目

〈設問2 自分自身の感染予防〉における「性感染症についての正しい知識を身につける」は、学年進行との間で有意に正の相関がみられた（ $\rho=0.223$ 、 $p=0.0015$ ）。

3. 初等中等教育での学習内容

小・中・高校等での性感染症に関する学習内容を複数回答で尋ねた（表1）。多い順から、「感染経路・予防法」176件（87.1%）、「性感染症の病名」162件（80.2%）、「性感染症の症状」140件（69.3%）であった。「性感染症の病名」と「性感染症の症状」とに有意な相関を認めた（ $\rho=0.208$ 、 $p=0.003$ ）。

4. 自分自身の感染予防

自分が性感染症にかからないためにしたいことについて、複数回答で尋ねた（表1）。「正しい知識を身につける」174件（86.1%）、「コンドームを必ず使う」172件（85.1%）がほぼ同数で多かった。「自分は感染しないだろうから特に何もしない」はなかったが、「特定の相手であれば大丈夫」と安心感を持つ回答が18件（8.9%）、「わからない」が4件（2.0%）あった。

5. パートナーからの感染告知時の交際と行動

1) 交際について

パートナーから「自分がエイズに感染していることがわかった」と言われた時の交際について、複数回答で尋ねた（表1）。「今までどおり交際を続ける」は、81名（40.1%）と最も多く、次は「交際の方法を変更する」61名（30.2%）で、そのうち自由記述に具体的方法を記入した者は39名（63.9%）にのぼった。「交際をやめる」は44名（21.8%）、無回答が16名（7.9%）あ

表1 エイズ、性感染症に関する学習や意識に関する回答と相関 N=202、人 (%)

設問	項目と回答数	
初等中等教育での学習内容	感染経路・予防法	176 (87.1)
	性感染症の病名	162 (80.2)
	性感染症の症状	140 (69.3)
	その他	1 (0.5)
	自由記述	1 (0.5)
	延べ回答数	480
自分自身の感染予防	性感染症についての正しい知識を身につける	174 (86.1)
	コンドームを必ず使う	172 (85.1)
	特定の相手であれば大丈夫	18 (8.9)
	自分は感染しないだろうから特に何もしない	0 (0.0)
	わからない	4 (2.0)
	延べ回答数	368
パートナーからの感染告知時の交際	今までどおり交際を続ける	81 (40.1)
	交際の方法を変更する	61 (30.2)
	(内、具体的に記述あり：表2)	39 (63.9)
	交際をやめる	44 (21.8)
	無回答	16 (7.9)
	合計 (%)	202 (100.0)
パートナーからの感染告知時の行動	自分でエイズの検査を受ける	156 (77.2)
	専門家 (医師・看護師・保健師など) に相談する	106 (52.5)
	身近な人 (友人・親など) に相談する	64 (31.7)
	パートナーに相談する	44 (21.8)
	その他	1 (0.5)
	延べ回答数	371
今後必要な知識	症状や感染の予防のための正確な知識	142 (70.3)
	エイズに感染している人の現状や生活	141 (69.8)
	感染者への支援の方法	45 (22.3)
	感染防止を訴えるための方法	36 (17.8)
	その他	2 (1.0)
	延べ回答数	366

注：＜パートナーからの感染告知時の交際＞以外は、複数回答。 **p<0.01 (Spearman の相関)

った。

「交際の方法を変更する」39名の自由記述を内容分析した(表2)。「診察をうける」「性交渉を検討する」「話し合う」「現実的に検討する」「別離を選択する」「知識を補強する」「支援者になる」の7項目に分類できた。

2) 行動について

パートナーから感染を伝えられたときの自分自身の行動を、複数回答で尋ねた(表1)。「自分でエイズの検査を受ける」が156名(77.2%)と最も多く、次いで「専門家(医師・看護師・保健師など)に相談する」が106名(52.5%)であった。「身近な人(友人・親など)に相談する」は64名(31.7%)で、最も少なかったのは「パートナーに相談する」44名(21.8%)であった。

「身近な人(友人・親など)に相談する」は「パートナーに相談する」との間に正の($\rho =$

表2 交際方法変更の具体策（自由記述の内容分析）

項目	記述内容（例）
診療をうける	・病院にちゃんと行ってもらう ・病院に行く ・病院に通院してもらい一緒に頑張る ・病院と一緒に行って調査して、結果を参考にする
知識を補強する	・血液の接触を避けたり。 ・きちんと勉強する ・正しい知識をもって、感染しないようにしながらつきあう
性交渉を検討する	・性交渉をしない ・エイズにうつらないようにしながら今まで通り仲良くする ・性行動をあまりしないようにする ・わからないが、性交渉はなくなるかもしれない。 ・性行為をしない、コンドームなどで感染しない方法を考える・・・エイズだからといって別れるのは差別にあたると思う。
話し合う	・真剣に話し合いをする ・話し合いをした上で交際を続けるか友人関係にするか決める
現実的に検討する	・リアルに考える
別離を選択する	・私のせいで、うつったのであれば、一緒に治していくけど私とじゃなかったら別れます。
支援者になる	・付き合うのではなく支えていく

0.259、 $p=0.0002$)、「自分でエイズの検査を受ける」との間に負 ($-0.239, 0.0006$) の、それぞれ有意な相関を認めた。

6. 今後必要な知識

エイズや性感染症についてこれから知りたいことについて、複数回答で尋ねた（表1）。

「症状や感染の予防のための正確な知識」142名（70.3%）、「エイズに感染している人の現状や生活」141名（69.8%）がほぼ同数で多かったが、負の相関をみとめた（ $\rho=-0.310, p=0.0000$ ）。「感染者への支援の方法」は45名（22.3%）、「感染防止を訴えるための方法」は36名（17.8%）であった。

自分自身を感染の可能性がある存在ととらえた自由記述として、「自分がもしなってしまった場合、やはりそれなりの知識を持っておきたい。」があった。また、「もしエイズなどで苦しんでいるなら手助けしてあげたい」という、支援する気持ちを記載したものがあつた。

7. 設問間の相関

5つの設問間では、有意に相関のある項目がみられた（表1）。

〈設問1 初等中等教育での学習内容〉の「感染経路・予防法」は〈設問4 パートナーからの感染告知時の行動〉の「自分でエイズの検査を受ける」（ $\rho=0.250, p=0.0003$ ）と、また「性感染症の病名」は、〈設問2 自分自身の感染予防〉における「コンドームを必ず使う」（0.212、

0.002) と、それぞれ有意な正の相関がみられた。「コンドームを必ず使う」はまた、〈設問 5 今後必要な知識〉の「エイズに感染している人の現状や生活」と有意に相関が認められた (0.210、0.0026)。

〈設問 4 パートナーからの感染告知時の行動〉の「自分でエイズの検査を受ける」は〈設問 5 今後必要な知識〉の「感染者への支援の方法」(0.234、0.0008) と、また「パートナーに相談する」は〈設問 5〉「感染防止を訴える方法」との間 (0.256、0.0002) に、有意に相関を認めた。

V 考 察

1. 初等中等教育での学習内容

〈初等中等教育での学習内容〉としては、「感染経路・予防法」が 9 割弱、「性感染症の病名」を 8 割程度、「性感染症の症状」はやや低く 7 割程度であったが、およそ学習済みと認識されていた。また「病名」と「症状」間に、有意に相関が認められ、病名を学習している学生は症状も共に学習している傾向にあると考えられた。

しかし各項目にそれぞれ 1~3 割程度の学生がチェックしていないことに目を向けると、初等中等教育での学習が不十分な可能性のある学生が少なからずいるということがわかる。学校教育における性教育、エイズ教育の展開方法や学習深度に課題があると考えられる。また正答を尋ねた設問ではないため、確かな知識が身につけているかについては、別の調査が必要である。

2. 当事者意識

対象者は、大学生、社会人として、エイズや性感染症についても当事者意識を持つことがのぞまれる年代にさしかかっている。自分自身の感染予防について、また仮定的設問としてのパートナーの感染告白時の対応について、を中心に検討する。

1) 自分自身の感染予防

自分が性感染症にかからないための予防策を知っておく必要があるが、「性感染症についての正しい知識を身につける」「コンドームを必ず使う」には、それぞれ 8 割 5 分以上の高い割合で回答があった。また、上級学年になるほど「正しい知識を身につける」ことが感染予防につながると考えていた。これらはひとつには、大学における専門教育が正しい知識を持つ機会となり、一定の成果がでている可能性を示している結果と考えられる。

反面、「特定の相手であれば大丈夫」と安心感を持つ回答が 1 割近くあり、さらに「わからない」もごく少数だがあった。これらは、行動レベルで感染予防について具体的に考える力の不足している者がいることを意味している。大学生活のなるべく早い時期、あるいはもっと早い時期に性交渉における感染可能性について学習の機会を作る必要がある。

総じて、大学教育の中で、さらにエイズや性感染症を予防するための啓発学習機会を持ち、学生が自分自身の感染予防に役立つ正しい知識を持てるよう育成する必要がある。保健所と共催

し、学生企画担当を募り、共に事前の学習を重ねながら開催した2008世界エイズデー企画「エイズを通じて生と性を考える」など、大学における参加型の学習機会の提供は、成人教育型の大学授業の一形態として意義があろう。

「コンドームを必ず使う」は、〈設問1 初等中等教育での学習内容〉「性感染症の病名」と有意な相関があり、コンドーム使用についての教育が浸透している面もあると考えられる。「コンドームを必ず使う」はまた、〈設問5 今後必要な知識〉「エイズに感染している人の現状や生活」とも相関があった。対象者は、机上の知識としてのみならず、使用しなかったらどのような事態になるか現実的に考えようとする、当事者として一歩進んだ意識を持ちつつあるのではないかと捉えられる。

このことは、エイズに対する深刻さの認知は男性に比して女性が有意に高いという、大学生を対象とした調査¹¹⁾と同様に、女性としての深刻さの受け止め方が影響しているかもしれない。再度本調査の対象者である女子大学生の置かれている状況を見ると、わが国においてHIV感染、エイズ患者共に増加してきている中で、女性の割合が他の年齢層より高いという15歳から24歳の層¹²⁾に属している。エイズを自分の問題、つまり当事者として捉えることを余儀なくされている対象といえよう。また、今回の調査では質問していないが、この年代は性交経験が半数近く、学年ごとに有意に上昇するという報告¹³⁾もあるように、成人への移行期であることも影響している可能性があるだろう。

2) パートナーからの感染告知時の交際と行動

仮定的な設問として、パートナーからの感染告知時の交際について尋ねた。交際を何らかの形で継続するとの回答が、計7割以上となった。パートナーとの関係性を大切にしながら、共に歩んでいこうとする意識が伺えた。反面、「交際をやめる」を選択する回答が2割、さらに無回答も1割弱あり、交際への深刻な影響を及ぼす可能性が伺えた。交際の変更に関する自由記述欄にも、6割以上が記載しており、当事者としての問題として考えようとし、真剣に悩んだ姿がうかがえた。

パートナーからの感染告知時の行動についての設問では、「自分でエイズの検査を受ける」という自律した行動を選択する回答が8割近く、最も多かった。この行動は「身近な人に相談する」と負の相関があった。また、初等中等教育における「感染経路・予防法」学習と正の相関があることから、予防教育の定着が当事者意識を高め、自律的な決断・行動を選択する気持ちを強化している面があると捉えられる。

3. 支援者としての意識について

〈設問5 今後必要な知識〉をみると、対象者が現在持っている以上の「症状や感染予防のための正確な知識」や「感染者の現状や生活」の知識へのニーズは7割程度あり、欲求は高かったが、この2項目間には負の相関があり、感染予防知識への欲求と感染者の現状を知ることへの欲求を同時に持つには至っていないようであった。また「感染者への支援方法を知りたい」は2割

程度、「感染防止を訴える方法」も2割弱と、支援者としての意識に関わる回答割合は低かった。

今後、HIV陽性者や支援活動を実際に担っている個人や団体からの情報提供を受けたり、共に活動する場を設定することにより、支援者としての意識を高めることが課題となると考えられる。

「感染者への支援の方法」は、〈設問4 パートナーからの感染告知時の行動〉「自分でエイズの検査を受ける」と相関があった。また「感染防止を訴える方法」は「パートナーに相談する」との間に有意な相関があった。

感染者を支援する方法を求める意識と、自分で検査を受けるという行動をとろうとする意識には共に、自己決定という自律的態度が背後にあるのではないかと考えられる。一方、感染防止を訴える方法を求める意識には、自己決定という面もあるだろうが、どちらかというパートナーが感染という事態に直面した際に、共に当事者であることを強く意識して協同し、組織づくりやシステム作りをしながら社会にアピールしようとする、社会への働きかけに向かう傾向を示しているのではないかと考える。

この結果はまた、教育実習が設定されている（2008年度当時）4年生が含まれていないため、教育実習で子どもたちへの保健指導や授業を実際に担当する実践的・専門的役割を担うことによる影響はほぼない。教育実習が支援者意識に影響する可能性が予測されるため、今後、教育実習を経た学生への調査も含めて比較検討する必要がある。

それに加えて大学教育においてさらなる正しい予防知識を提供するためには、当事者意識を育てながら同時に支援者意識を高められるような学習機会を別に提供することが必要であると考えられる。HIV陽性者や患者、実際に支援活動を展開している保健センター・NPOなどの個人や組織と共に、活動し考える機会を得られるような、参加型・地域連携型企画を積極的に取り入れることが大切であろう。

お わ り に

四半世紀前には不治の病であったエイズも、近年治療が発達し、感染しても発症を防ぐことが可能な感染症のひとつとなってきた。しかし、地球レベルではエイズはますます広がり、深刻な問題であり、わが国においても全く楽観視できない。まさに今、その問題で苦悩している多くの人たちが共に生活し、同時に様々な場で支援者が育っている。

しかしながら、おそらく当事者意識を持つべきひとりであろう学生においても、日ごろの話題にエイズや性感染症が持ち上がることは少ないようで、支援者としての意識を持ち行動することに結びつく機会はさらに少ないと思われる。今回の結果からもそれが確認できた。

しかし、学生が企画段階から参加した2008世界エイズデー講演・パネルディスカッション企画「エイズを通じて生と性を考える」の出口調査¹⁴⁾では、自分にできることが「ある」との回答は6割を超え、「教師になった時に生徒との向き合い方や相談に役立てたい」「エイズ予防啓発活

動に参加したい」などの意見が綴られていた。性感染症予防啓発ボランティアや、HIV 陽性者、地域で活動する保健師、学校場で養護教諭としてエイズ教育にかかわった大学教員を招いた講演・パネルディスカッションで、学生も実際に当事者や支援者に会うのは初めてのものが多かったと思われる。

日ごろの問題意識は、日常的な経験から育っていく。学生たちが大学の内外で、実際の当事者・支援者と出会い、語り、共に考える経験を積み重ねながら、生きた学校教育ができる人材として育ち、今後の予防や啓発に貢献できるようにと希望する。

本研究は、単一大学の1学科1～3年生202名の女子大学生から得られた、限定された回答の分析であるが、世界的にエイズや性感染症が拡大し、日本においても問題となっている中で、大学として取り組む必要のある課題の一部を示す結果が得られたと考える。今後、この年齢層の女性の感染予防や、学校教育の場での有効な予防教育がますます重要となる。広範囲での調査や教育の試行が求められよう。

謝辞

本研究は、尼崎市保健所にご共催いただいた、2008年度総合健康学科学術企画「エイズを通じて生と性を考える」の一環として実施した調査を基に、まとめたものである。

調査にご協力いただきました皆様に感謝いたします。また、集計時の作業を、総合健康学科実習支援室千葉求美さんに一部援助していただきました。ありがとうございました。

注

- 1) 本論文は、山崎裕美子他、女子大学生のエイズ・性感染症に関する意識、総合健康学科学術企画報告書 エイズを通じて生と性を考える、41-48, 2010. を基に、1～3年生のデータに絞って再検討したものである。
- 2) 小林壽子，“性教育シリーズ”〈そのⅢ〉-養護教諭として如何にエイズ教育を行うか-，鈴鹿短期大学紀要9, 55-72, 1989.
- 3) UNAIDS, World Health Organization, 2008 AIDS EPIDEMIC UPDATE,
http://api-net.jfap.or.jp/spPage_2009/htmls/images/world.pdf (2010. 3. 10 検索)
- 4) 厚生労働省エイズ動向委員会，平成20(2008)年エイズ発生動向-概要-
http://api-net.jfap.or.jp/mhw/survey/08_nenpo/gaiyou.pdf (2010. 3. 10 検索).
- 5) 同上
- 6) 前掲2)
- 7) 久保田美雪，渡邊典子，小柳恭子，新潟県における高校生のエイズに関する調査，新潟青陵大学紀要3, 183-191, 2003.
- 8) 深田博己，高本雪子，深田成子，AIDS 教育用印刷教材の効果(1)，広島大学心理学研究7, 273-289, 2007.
- 9) 今枝真理子，保健師と養護教諭の連携によるエイズ予防教育の展開(特集 学校・家庭・地域とつながる)，セクシュアリティ31, 58-63, 2007.
- 10) 性感染症は，STD (Sexually Transmitted Disease) あるいは STI (Sexually Transmitted Infections) と略される。(仲尾唯治，HIV/AIDS の社会言論的展開，日本保健医療行動科学会年報24 健康格差社会における病気と医療-行動科学的アプローチ-，1-15, 2009.)
本論では日本語表記とした。

- 11) 前掲 8)
 - 12) 前掲 4)
 - 13) 忠津佐和代, 梶原京子, 篠原ひとみ他, 大学生の性に関する認識の実態とピアカウンセリングへの期待－ピアによる性教育ニーズと教育内容の検討－, 川崎医療福祉学会誌, 17(2), 313-331, 2008.
 - 14) 加納亜紀, 山崎裕美子文責, 参加者のご意見・ご感想 (会場での質問紙調査から), 総合健康学科学術企画報告書, エイズを通じて生と性を考える, 30-31, 2010.
-

[やまさき ゆみこ 基礎看護学]
[こんどう あきとし 医学]
[かのう あき 養護学]
[はやし てるこ 学校保健学]
[うらかわ ふみえ 地域保健学]
[いのうえ ふみこ 地域保健学]
[いでい りえ 養護学]
[いのうえ としこ 地域保健学]
[うらぎし ひでお 教育学]
[はやし よしみ 栄養学]
[よしかわ さちよ 地域保健学]
[さかた のりこ 地域保健学]
[まきがわ まさる 健康学]